

【講評】 実践発表の振り返り （概略）

広島県立生涯学習センター 生涯学習推進マネージャー 山川 肖美

東広島市の事例では、保健師さんや事業者と連携し、探りながらハイブリッドをされたチャレンジということ。

「親プロ」対象者には育児という事情のある中で、オンラインの良さを活かされています。オンラインは人との繋がりができにくいと言いますが、実はそうではない。ここで出会った人と日常的なつながりができたことが良いことだと思います。オンラインはフラットを感じやすい良さもあります。

紙ベースの補足としてデジタルベースでやることを学ばせてもらいました。リアル状況の良さをハイブリッドで活かした終了後のおしゃべりが良かったと思います。講座前後の余白で本音が出易いからです。

また、生涯学習フェスティバルの中で「親プロ」を開いたことが良かったです。「親プロ」には世間の認知度が低い面がありますが、通りがかりの人がいれば、実施自体がPRを兼ねることができます。

さらに、スマホアプリを使っておられますが、「親プロ」に出た人の記録を残していけるので、ポートフォリオになる可能性があります。

福山市の事例では、「親プロ」を続ける、拓げる工夫をしたことを教えてもらいました。その中で、「見える化」の工夫が大事な点です。オンラインは言葉だけが飛んでいきますが、「事前資料」「付箋」「ファシリテーション通信」といった「見える化」のノウハウがありました。それには「特別支援（聴覚障害）の考え方を利用しました」というのも大事な視点です。

コミュニケーションツールとしてのPRとして、ファシリテーター同士のコミュニケーションもあれば、別の通信で対象者とのコミュニケーションもできます。

神石高原町の事例も、始めたばかりの感想ということですが、「教材が地域に合わない部分がある」ということですが、県の「親プロ」を「ローカライズ」していくことを考えていけば良いと思います。元から変えていくことを前提の教材もあります。

ファシリテーターとしてのスキルアップは場数が大事です。松田さんが始めに言われた「体験から学ぶ」「失敗から学ぶ」「学びの成果を生かす」の3つが大事です。ファシリテーターは語源からいくと、プロフェッショナルやスペシャリストでなく、熟練者であり、エキスパートを目指すといっていました。

NPO法人化は、組織対組織でデザインでき、行政と民間事業者で作っていくもので、「親プ

口」を含んだプラットフォームになります。「親プロ」に関心のある人、ちょっと関心のあった人に広げるのに有効な方法です。活動の参加には4層あり、①地域活動のコアにいる層（皆さんはここ）、②地域活動のコアにいる層をサポートする層、③少し関心はあるが参加をためらう層、④あまり関心が無い層、とあります。東広島市や福山市ではアプリや通信、口コミを使いましたが、もっと広い層に向けて、3層目とは違うアプローチでどうすれば良いか考えていく必要があります。

○東広島市：講評を聞いて、チャレンジして良かったと思いました。オンラインに抵抗がある中でチャレンジして、可能性が広がりました。それ自体がPRのツールになると言われ、納得しました。余白の時間のことですが、動画の前に子供達と画面上で手遊びしていました。そういうのが重要なんだと、自分たちでできることからチャレンジしていこうと思いました。

○福山市：「見える化」は普段から気を付けて大切にしてきました。先生からも言っていたき、これからも取り組んでいきたい思いを強くしました。通信を通して、ファシリテーターだけでなく、対象者の方ともつながっていきたいと思います。

○山川：リアルだと白板を見て話し合えますが、成果の共有について考えていて、講義ではグラフィックレコーダーを職業にしている人が画像化してくれます。

○神石高原町：「失敗から学ぶ」ということで、更に頑張っていこうと思います。NPOと協力して経験を積み重ねていきたいです。

○山川：平成20年から始めていたのを、令和2年に会を結成しようと思われたのはどうしてですか？

○神石高原町：NPO（「神石高原つたえるネット」）を立ち上げたのがきっかけです。

○山川：コロナであきらめていた面が多い中、コロナじゃなくやっていこう、神石高原町も地域に誇りを持つようにやっていこうと、そんなきっかけで「やろう」となったのは素敵だと思います。